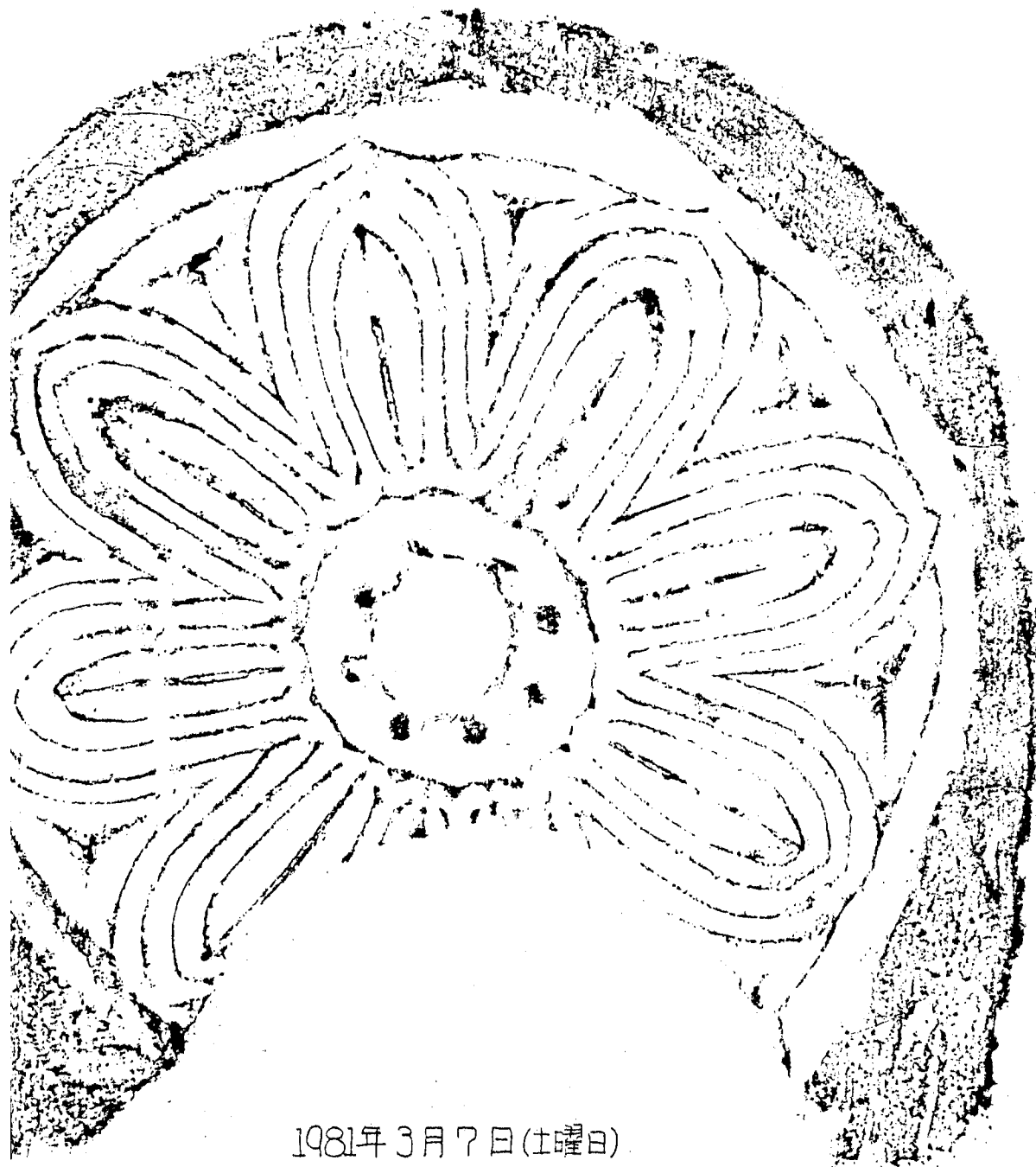


# 南春日町遺跡

現地説明会資料



1981年3月7日(土曜日)

(財)京都市 埋蔵文化財研究所

南春日町遺跡現地説明会資料

1981年3月7日（土曜日）

（財）京都市埋蔵文化財研究所

遺跡所在地

京都市西京区大原野南春日町

1 はじめに

本調査は光華女子学園グラウンド造成工事に伴う事前発掘調査で、1980年12月に試掘調査を行い、1981年1月19日から2ヶ月間の予定で発掘調査を行っている。

調査地は、以前より瓦・土器などが出土しており、試掘調査で遺構を検出し大量の瓦が出土したので寺域及び下層の遺構の確認を目的として、発掘調査を行なっている。

今回の発掘調査により、掘立柱建物跡・塔跡の2棟の建物跡とそれに付属すると考えられる溝・壇などを検出した。またこの建物跡の下層には、瓦を多量に含んだ包含層があり、下層遺構の確認を進めている。

2 遺構

塔跡（SB 10）：

調査区南側で検出した二重基壇を持った建物 SB 10 をその平面形態より、塔跡と考えている。

基壇上面は削平が激しく、心礎を除き礎石は全く残存していない。塔の平面規模は、心礎と12ヶ所の礎石据えつけ痕跡から割りつけると、1辺4.5 mに復原され、柱間は3間で1.5 m等間に割りつけていたと考えられる。その中心は1.6 m X 1.4 mの心礎が据えつけられているが、上面は削平されている。礎石の据えつけ痕跡は据えつけ穴とその中に根石を検出し、四隅の据えつけ穴は大きく直径1.2 m～1.4 mであり、その間のものは、直径0.9 m～1.0 mである。

基壇は、正方形で二重になっており、一重目が1辺9.2 m・高さ

25 cm、二重目が1辺7 m、高さ18 cmで一重目南側中央に幅1.4 mの階段がついている。基壇化粧は、いずれも20 cm前後の河原石を積んでいるが、後世の削平のために北側はかなり残りが悪い。基壇は、下層包含層の上に茶褐色の土を積んで築かれているが、版築などは見られない。

塔跡基壇の北側2.1 mのところには、東西方向の高さ20 cmの壇が長さ約9.5 mほど検出され、塔跡と同様の化粧が行われている。この壇の方向は塔跡と同一方向である。

また塔跡基壇の南側2 mの所には、石組の幅37 cm・深さ15 cmの東西方向の溝が長さ約5.2 m検出された。これも塔跡の南辺と同一方向であり、壇とともに塔に関連する遺構であると考えられる。

### 廂立柱建物跡 ( SB 20 ) :

調査区の北側で検出した建物跡で、東側に後世の落ち込みがあり削平されているが、東西方向の建物で、桁行2間・梁行2間分を検出しており、母屋の南北に廂がついている。梁行は等間で1.9 m・桁行等間で1 mである。廂の柱穴は南に2 m・北へ2.7 mのところにある。柱穴は直径50 cm～60 cmで根石を入れ、廂の柱穴は小さく直径約30 cmである。

### 3 遺物

遺物は瓦類が大部分を占め、他に土器類・金属製品・石製品がある。軒瓦は数百点出土した。軒丸瓦は6種類あり、そのうち1種類は大きく、他は直径が10 cm前後の小さなものである。軒平瓦は5種類あり幅が1.5 cm前後の小さいものがほとんどである。これらの丸・平瓦は行基式で幅が狭く、長さは30 cm前後で短い。鬼瓦は、鬼面のものが1種・蓮華文のものが2種ある。これも小型で幅・高さとも約17 cmぐらいである。赤褐色を呈した軟質のものが大多数を占め、茶褐色で硬質のものは量が少ない。

土器類には須恵器・土師器・緑釉陶器・二彩土器・瓦器・黒色土器などがある。時期は平安時代前期のものが多い。

金属製品には、鉄製の風鐙が下層の溝より出土している。身の断面は扁円形で、下縁には弧状のえぐりを入れており、高さ14 cmで小型品である。その他のものとしては鉄釘が若干出土している。

石製品には水晶玉があり、上層の包含層より出土している。直径2.1 cm・厚さ1.1 cmである。

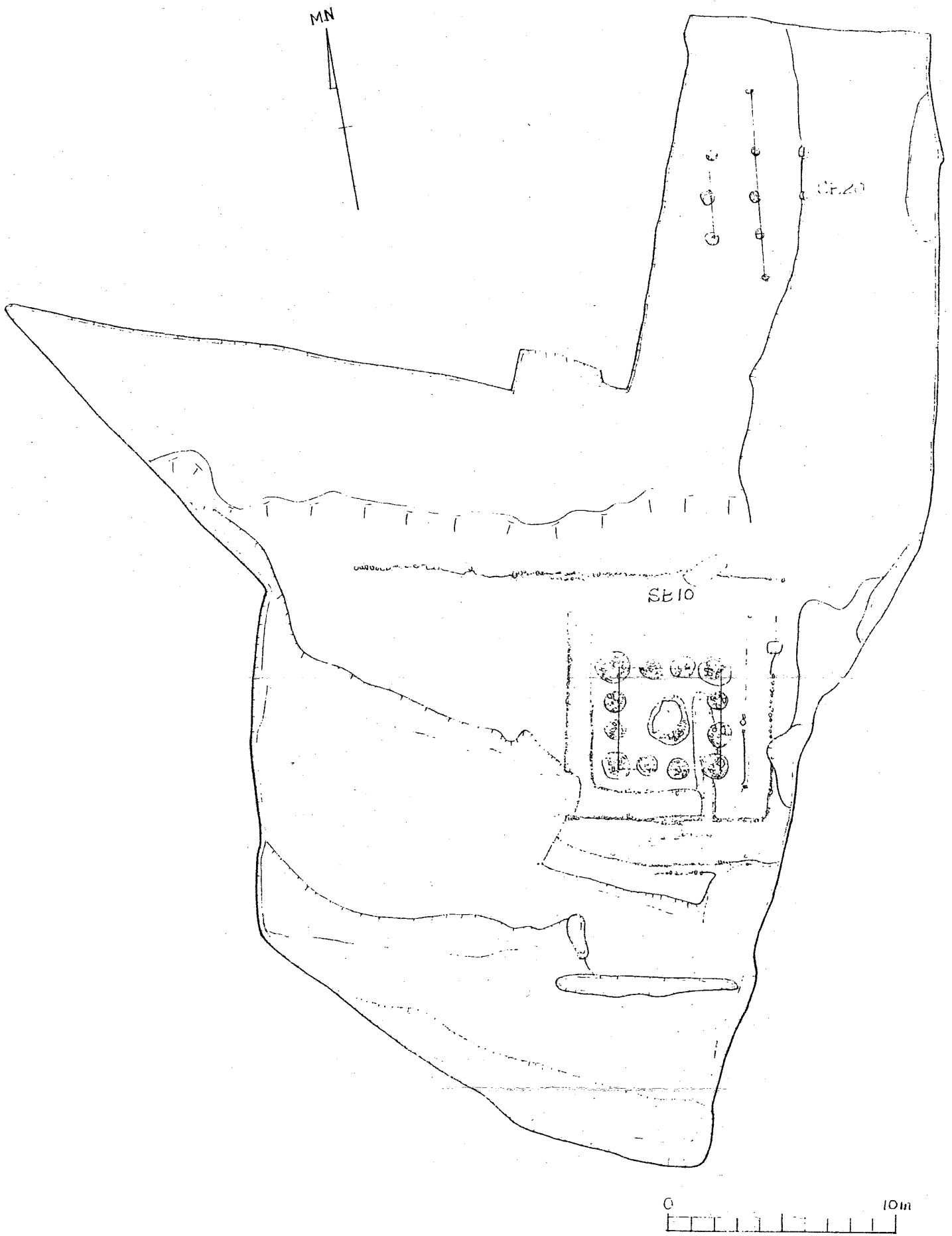


图 2 调查区平面图

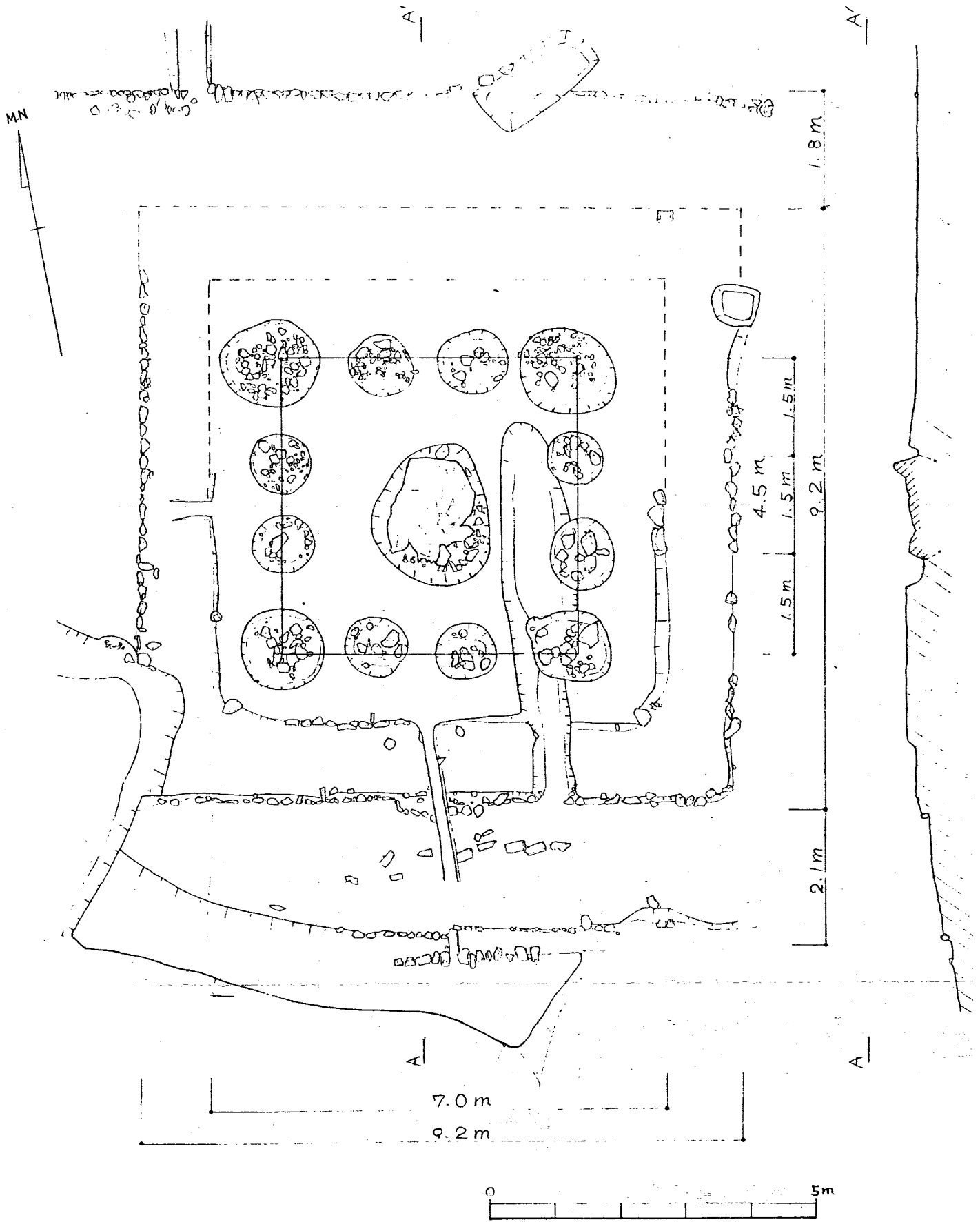
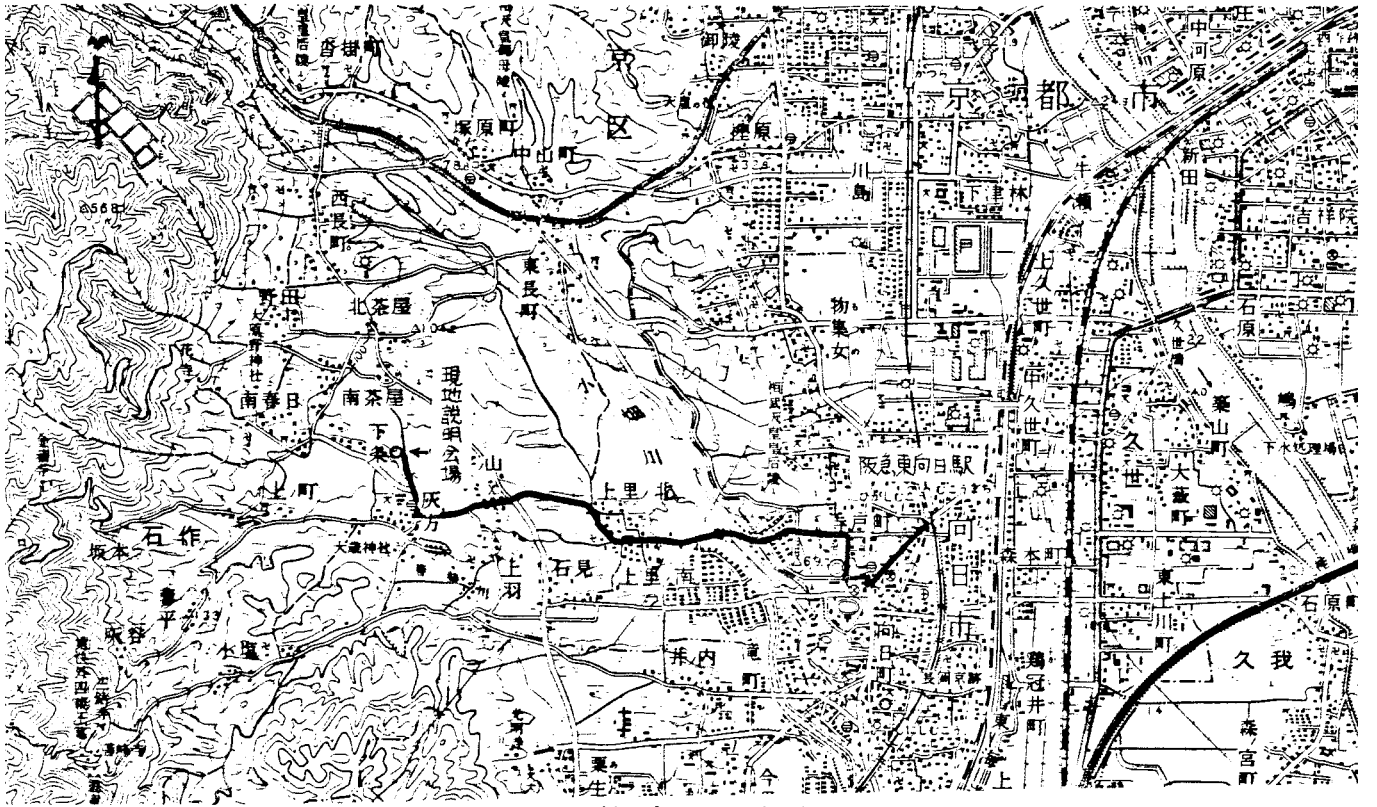
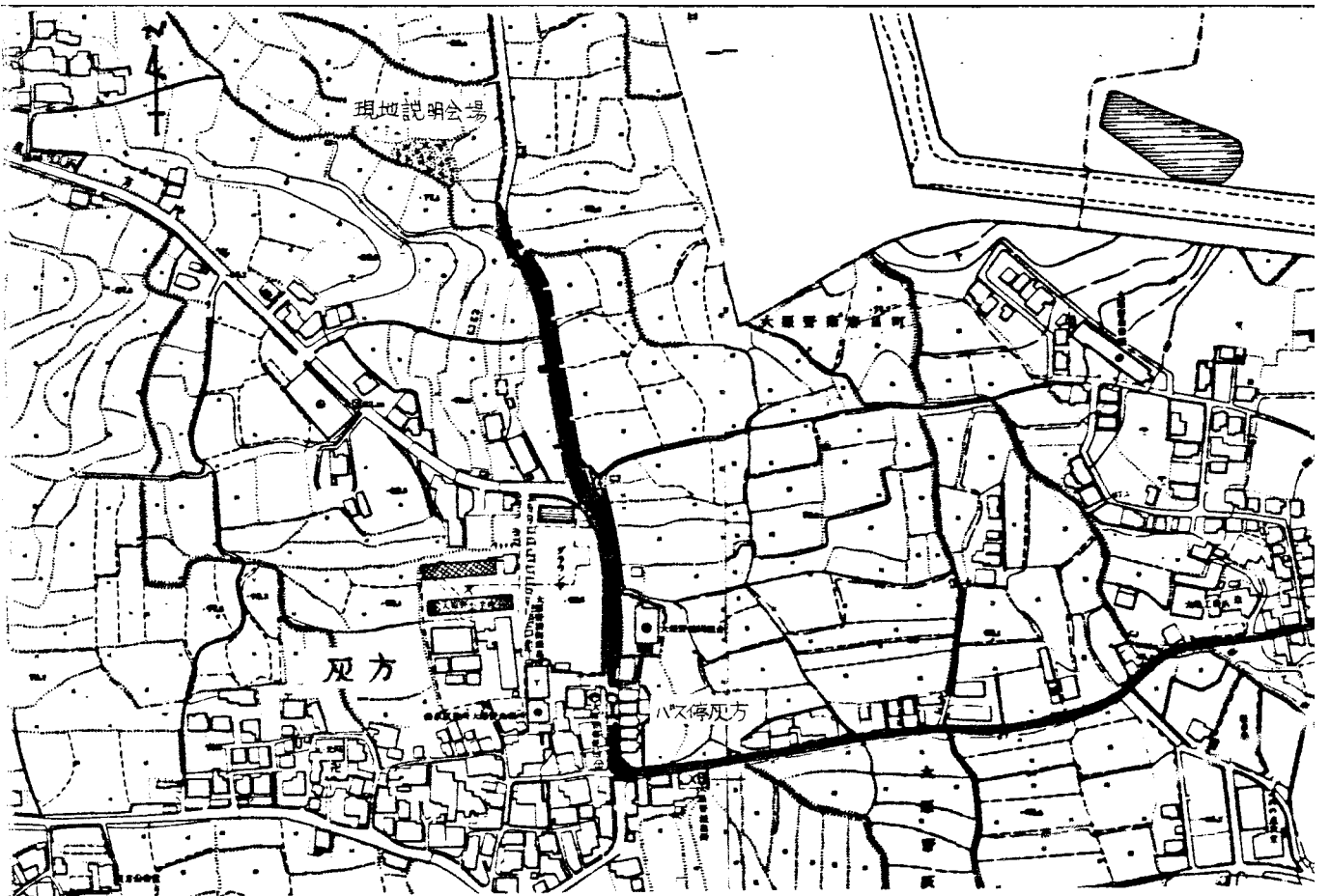


图3 SB10 平面图



現地説明会場周辺図 (1/50,000)



現地説明会場位置図 (1/5,000)

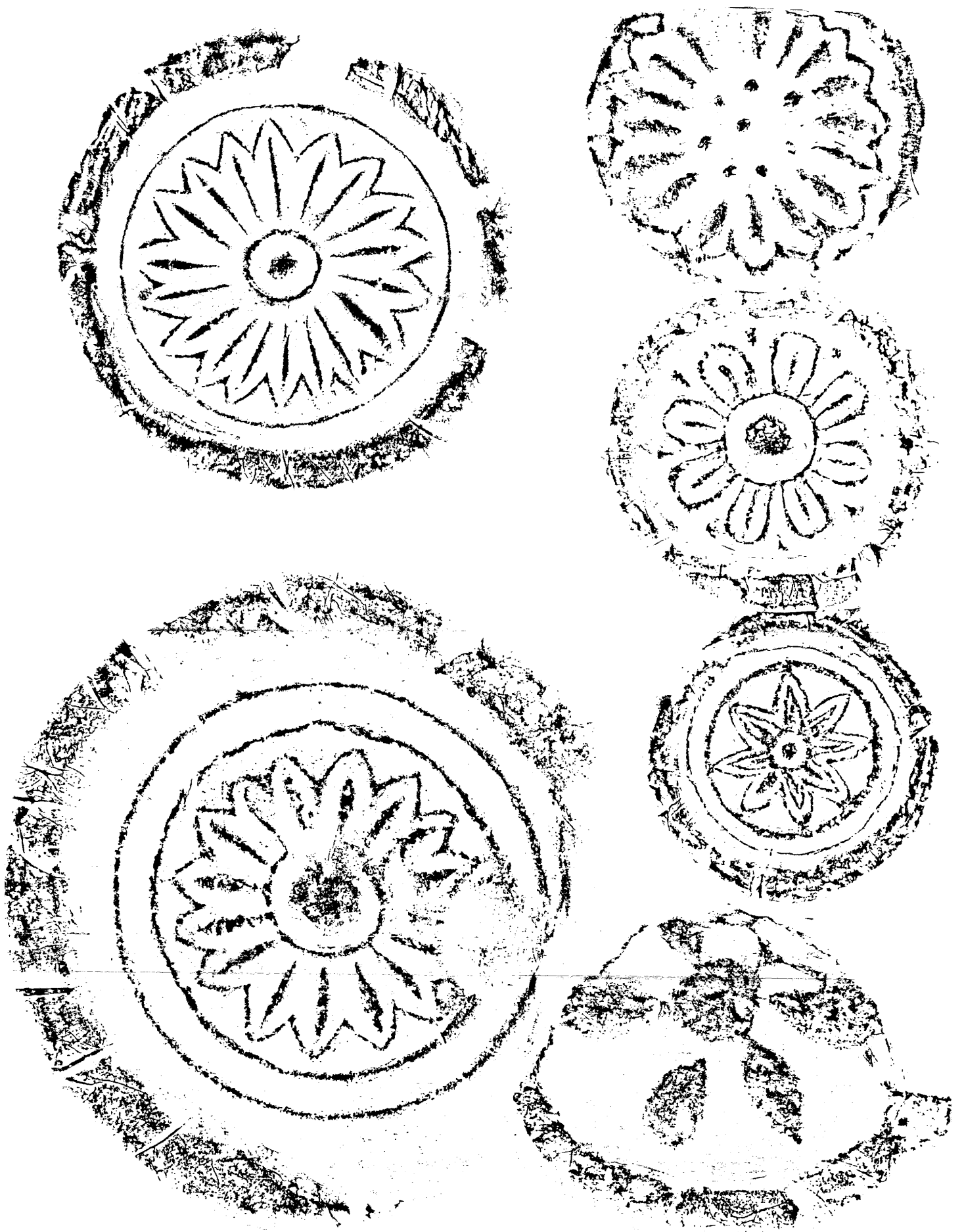


图4 唐瓦拓片 (1:1)

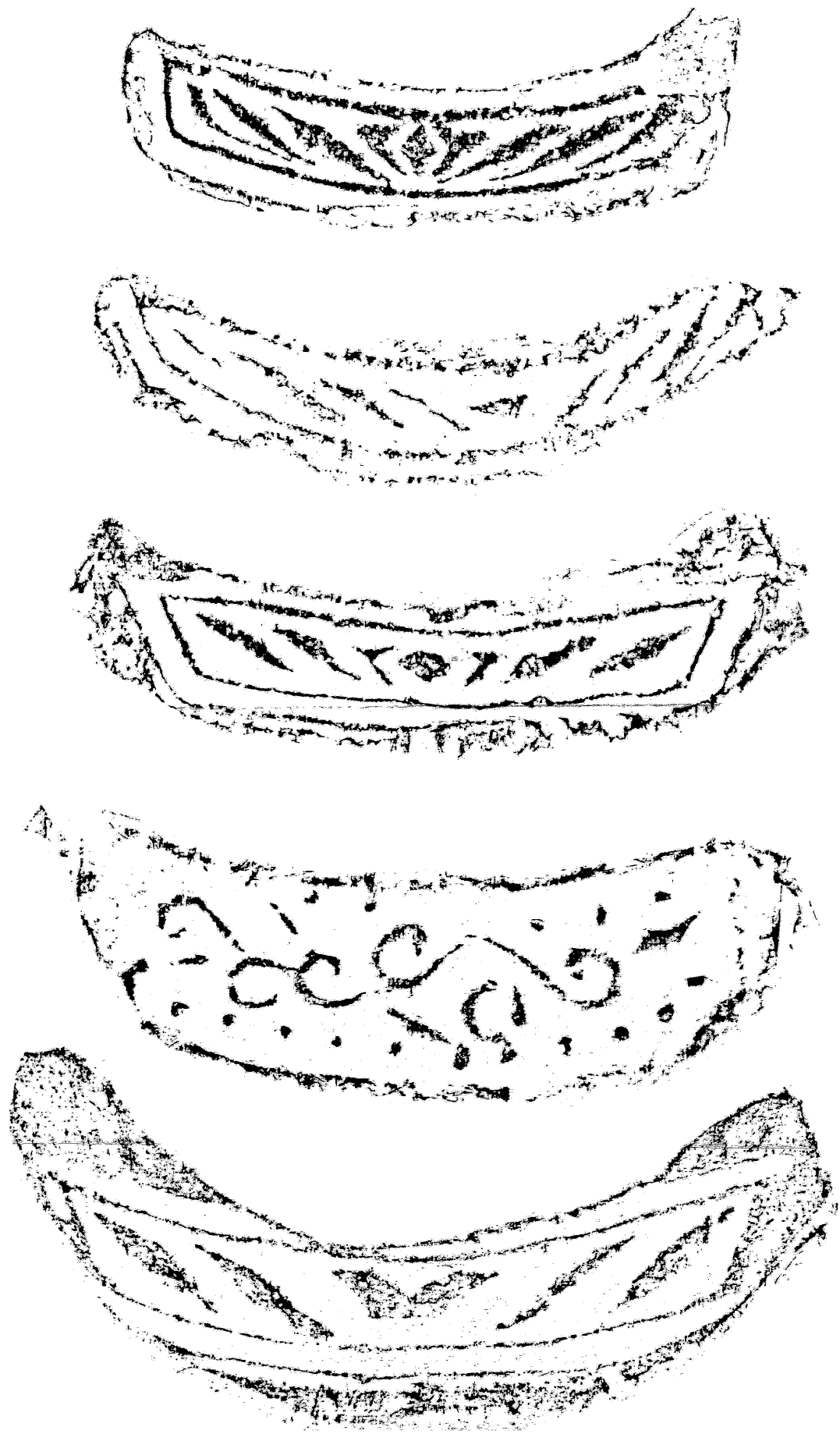


图5 新石器时代彩陶 (1:1)